

* ソ連製人工衛星追跡用 AFU カメラ復元 (その1)

堂平観測所は2000年(平成12年)に閉所された。当時の国立天文台ニュースによれば堂平観測所にあった観測装置などはあちこちに引き取られたが、91cm 望遠鏡の去就は決まっていないとある。日本初の本格的シュミット望遠鏡であった50cm シュミット望遠鏡は国立科学博物館に引き取られ、NASA が持ち込んだ人工衛星追跡用ベーカーナンシュミットカメラは姫路科学館に譲られた。堂平観測所には人工衛星追跡用望遠鏡はもう1基あり、それは当時のソ連から持ち込まれたAFUカメラである。中桐は、2000年頃は「すばる」建設のためハワイに滞在中であったため、この望遠鏡の消息を知らなかった。ある方からAFUカメラは法月技研に託されたと聞いた。法月技研の前身は法月鉄工といい、当時の社長の法月惣次郎(のりづき そうじろう)氏は、静岡県焼津市で鉄工所を経営していたが、電波望遠鏡の製作で世界に知られた人物であった。野辺山太陽電波観測所当初の太陽電波干渉計、三鷹に建設された6m ミリ波望遠鏡の架台は法月鉄工所で製作されたものであった。また堂平観測所に建設された月レーザー測距3.6m 望遠鏡などユニークな望遠鏡を数々作った方であった。現在の法月技研の社長さんは、法月惣次郎市の娘さんで、中桐がハワイに滞在中に「すばる」の視察に来られたこともあり、また国立天文台の何かの行事でお話しする機会があって、懇意な事もあり、中桐の博物館構想をお話し、AFUカメラの法月技研での役目が終わっているなら、お譲りいただけないかとお願ひしたところ、譲渡を快諾していただき、6月24日、14個のソ連製の木箱に納まったAFUカメラの荷物が届けられた。このニュースはアーカイブ室新聞29号に書いた。木箱は長年保管され、何年も開かれなかったらしく、ほこりにまみれ、異様な臭いがするのであった。箱に書かれた文字はロシア語とアルファベットで書かれた宛名であり、箱の中のものを示すような文字はなかった。この望遠鏡を堂平観測所で使っていたのはソ連のリガ天文台のラプーシカだったと堂平観測所にいたことのある野口本和氏から聞いた。

開いた木箱と中の様子は写真1～写真14のようであった。



写真 1 蓋を開いた木箱群



写真 2 図面、ネジ、工具など



写真 3 カメラレンズ



写真 4 レンズフード



写真 5 カメラ部



写真 6 ファインダー部



写真 7 架台ベース部1



写真 8 架台ベース部2



写真 9 AZ 軸部



写真 10 工具類



写真 11 ヨーク部架台



写真 12 ヨーク部



写真 13 トラッキング軸架台



写真 14 制御部・ファインダー架台

写真の中に図面と書いたものがあるが、図面らしきものは電気回路の図面のみで組立図、組み立て手順書のようなものは一切なかった。まあ、天文台48年生だ、なんとかなるさとこれらの組み立てを始めた。しかし、何年間も開かれた事のない木箱は臭かった。そして1人で出来ることは限られている。なにしろ重いのである。

同じアーカイブ室所属の佐々木君の助力を得て組み立てを始めた。組み立て後、展示する高さを考え、また場所を移動するので台車付き作業台の上に組み立てることにした。完成時の写真が2枚手に入っていたので作業は順調に進んだ。ほぼ4時間で下の写真15のように組み上げる事ができた。元の姿になったのは何年ぶりなのだろう。組み立て時の様子については次号で報告したい。



写真 15 組み上がったAFUカメラ

組み上がったAFUカメラは自動光電子午環ドームの望遠鏡フロアに見学していただけるように展示してある。ぜひご覧いただきたい。